

横浜市立大学学術情報センター

貴重書 月替わり展覧会リーフレット (171)

2025年12月の作品は

『甲斐叢記 前輯 五』

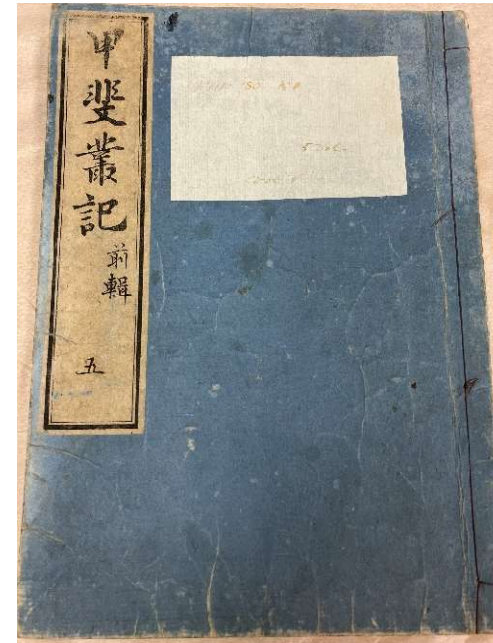
展示テーマ

～『甲斐叢記』の中の富士山～

富士山は古くから、日本を代表する山として広く知られてきた。現代では観光地の一つとなっているが、火山活動が活発だった時代は修行を目的とした一部の人のみが富士山に登っていた。特に、貞観6（864）年の貞観大噴火や宝永4（1707）年の宝永大噴火などの大規模な噴火による地形の影響は今でも確認できる。そして火山活動が穏やかになると、富士山を目指す庶民が多く現れた。江戸時代には富士山を信仰する「富士講」というグループが各地に生まれ、お金を集めて代表を選び祈願を託す

「講」の仕組みを利用して、全国から信者が富士山に訪れた。その富士講達のために食事の提供や祈祷を行う「御師」という人々も表れた。中でも上吉田は御師の家である御師坊が立ち並ぶ登拝拠点として発展し、御師町の入口を示す金鳥居が今も残っている。

このように古くから様々な文化と関わってきた富士山に関する記述があるのが、『甲斐叢記 前輯 五』である。富士山の歴史や、当時の富士山にあった名所について書かれている。その富士山の名所について詳しく説明していく。



『甲斐叢記 前輯 五』

（1冊）

江戸時代、嘉永4年（1851）

作者：大森快庵編（1797～1849）

版元：藤屋伝右衛門

縦 26.3cm × 横 18.7cm

この本は大森快庵が執筆した『甲斐叢記』の第5巻である。大森快庵は江戸後期の儒者で、朝川善庵の下で儒学を学んだ後に商業と農業で財を成した。晩年は『甲斐叢記』や『富士紀行詩』、『楽国雑詞』などを編纂した。『甲斐叢

記』は全10巻からなる甲斐の地史であり、土地の特徴や寺社仏閣、名所についてまとめられている。この5巻は鎌倉海道、荻原口、雁坂口の3つの道と、その近くにある名所について書かれている。鎌倉海道は中世に鎌倉まで往復するために使われていた道であり、富士山や山中湖はここで解説されている。萩原口は現在の青梅街道、雁坂口は現在の秩父往還にあたる。

この本の特徴の一つが、土地の説明だけではなく、その土地が描かれた和歌も取り上げているところだ。例えば、現在の笛吹川沿いにある「突出磯」は多くの歌が詠まれた場所であり、『甲斐叢記』でも「塩の山さし出の磯に住千鳥君が御代をは八千代とぞ啼」などの和歌が書かれている。また、その土地に関係する荻生徂徠や関口雪翁の漢詩も取り上げられている。土地にまつわる和歌や漢詩を取り上げることで、その土地の歴史や風情を感じさせる説明となっている。さらに、名所の絵が見開きで描かれているページもある。見開きで描かれているため、溪谷や山脈などの景色の広大さが伝わるようなものになっている。

展示のみどころ

～甲斐叢記に書かれた富士山～

『甲斐叢記 前輯 五』で最も詳しく説明をされているのが、富士山の項目である。『万葉集』などの歌集から和歌を引用して富士山の歴史を解説し、当時富士山に建っていた施設や神社について解説している。ここで注目したいのが、一合目から九合目、そして山頂に関する解説である。『甲斐叢記 前輯 五』では、それぞれの場所の見所について解説しており、中には現在まで残っているものもある。現在の吉田口登山道にあたる一合目から山頂までの名所の中で、いくつかを紹介する。

・二合目 小室浅間祠（御室浅間神社）

貞観6年（860）に富士山が噴火し、その後、占いによって噴火が起きたのは駿河国浅間名神における祭祀怠慢によるものとされたため、建設されることになった神社。富士山中最古の神社と言われており、『甲斐叢記 前輯 五』でも「貞観七年十二月九日に祀る所にて此山に勧請の始なりと云」とある。昭和49年（1974）に河口湖にある里宮境内地に本宮が遷された。二合目にある拝殿は今でも見ることができるが、建物は倒壊し鳥居が辛うじて残っている荒廃した風景となっている。

・五合目 小御嶽祠（小御嶽神社）

岩長姫命と日本武尊を祀る神社。『甲斐叢記 前輯 五』の17枚目には、「岩長姫命に日本武尊を配祀する詣ずる人いと多く天狗の俣面及び風鈴鈴等の最重きものを納めあり 西の方に天狗の庭といふ所あり樹木皆偃臥て種々の形を成し人手にて作れるごとし」と書かれている。現在も小御嶽神社

そのものや天狗の庭という言い伝えは残っており、小御嶽太郎坊正真という天狗が道開きの神様として祀られている。神社で行われる開山祭では、天狗の面を付けた人がしめ縄を



斧で切って山開きの合図をするという風習もある。

『甲斐叢記 前輯 五』の18～19枚目の挿絵には「詣嶽御小」と書かれており、人々が横にした天狗の面を担いでいる様子が描かれている。当時行われていた小御嶽神社のお祭りが、『甲斐叢記』に書いてある通り天狗の面を納めている場面の様子だと考えられる。この絵に関する説明は『甲斐叢記』の中に書かれていないが、絵の中の人々のにぎやかな様子から江戸時代の人が天狗を信仰し親しみを持っていたことが伺える。

・九合目 火御子

かつてあったと言われる白色の大きな丸い石。「物陰の映こと鏡の如し裂て五段となれり旭日の地上を離れんとする時弥陀三尊の影此石に映ることあり此を來迎といふ」と『甲斐叢記』に書かれている。なお、江戸時代までは暗闇の中で行動する危険を冒さず、五合目から九合目で御来光を拝む者も多かったと言われている。

このように、『甲斐叢記 前輯 五』に書かれている名所からは、人々の富士山への信仰と名所の関わりが伺える。また、信仰や文化によって造られた建物が今でも残り、風習が受け継がれていることが分かる。

参考文献

- 甲斐志料刊行会編(1932)『甲斐資料集成2』甲斐志料刊行会
岩崎仁(2024)『富士山下山ガイド』静岡新聞社
篠原武(2013)「吉田口登山道のいまむかし」『レンズが撮らえた 幕末明治の富士山』小沢健志 高橋則英監修、p182-191 山川出版社
富士市「富士山の噴火史について」(<https://www.city.fuji.shizuoka.jp/safety/c0107/fmerv0000000oxtb.html>) (最終閲覧日 2024/11/11)
富士御室浅間神社「富士御室浅間神社」(https://fujimurosenjenginja.jp/index_sub1.html) (最終閲覧日 2024/11/11)

あとがき ～貴重資料に触れて～

江戸時代に存在していた場所が今も残っていることや、富士山が江戸時代でも親しまれていたことが分かり、より貴重資料に対して親しみが沸いた。

また、実際に『甲斐叢記』を読んでみて、まず書かれている字の丁寧さに驚いた。漢字の大きさが均等でとても読みやすいため、実際に読んでみてほしい。

※コレクションの閲覧は、作品保護のため、展示品を除き申請が必要です。また利用は学術研究目的に限らせていただいております。

※過去の展示はオンラインでも公開中です！

※第172回展示は令和8年1月上旬からを予定しています。



令和7年12月1日発行

令和6年度 日本文化論B受講生 編集

236-0027 横浜市金沢区瀬戸 22-2

横浜市立大学 学術情報センター